

JASO発 暮らしてつづける街へ<第 12 回>

東日本大震災 第 15 次調査報告



近藤一郎

松島の瑞巖寺も被害を受けたはずと、調査に先立ち、松島へ立ち寄ることにした。五月の連休の祭日でもあり、仙石線の電車は予想以上に混んで、観光客で賑わう様子が想像できた。沿線に見える住宅は外壁や屋根が修復されていたが、いずれも真新しいサイディング貼りによって代わり、街の時間的な重なりが見えない厚みの無い風景になってしまっていた。

瑞巖寺は平成の大修理を終えて、堂々とした伽藍の姿が見られ、当時の藤原氏などの歴代の勢力と繁栄をうかがい知るのに十分であった。かつての参道は海ぎわからうっそうとした林の中を歩いた記憶であったが、復旧工事中の参道は広く、空が抜けて、イメージが全く異なった。津波被害は大きかったのである。海岸沿いの食堂や土産物屋はもちろん、この参道も被害を受けたが、本堂は無事だったと聞いている。松島湾に浮かぶ多くの島々が津波の力を吸収したのである。以前のうっそうとした並木の参道となるには年月がかかるであろうが、参道を歩く人波が、ほどよい賑わいであった。



復旧工事中の瑞巖寺の参道

災害復興住宅を見る。

1. 石巻市新門脇地区復興住宅

5階及び6階建ての復興公営住宅が公園と墓地を挟んで、2つの街区に離れて建っている。いずれも津波避難ビルの表示が外壁上部にあり、屋上に上がることができる。ただ、この地域は盛土高さがあまり高くないのが気になった。この区画整理区域の海側には高盛土道路があり、それが2番目の堤防として津波時に機能するようである。

復興住宅は、エントランス廻りや集会室などの共用部がゆったりと配置され、駐車場や自転車置場なども十分、高齢者対応もなされている。ただ、生活感が見えないのは、周辺が区画整理を終えた空地のままで、道路も整備中の箇所があるからだろう。広い公園は出来ても、住宅以外はお寺と墓地ばかりであり、店舗やそれ以外の街の雑多さが全くない。歩くには街区は単調で大きすぎる。



石巻新門脇地区復興計画 (石巻市 HP から)



新門脇地区の復興公営住宅、B街区

道路や公園の計画された開放感があっても、生活感のある街としては未完成であった。

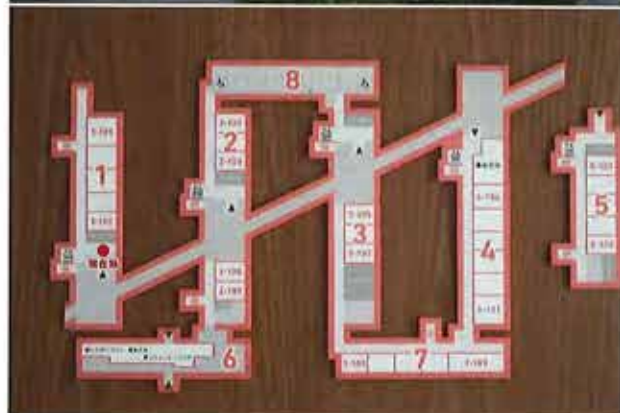
この地は2つの大きなお寺と数箇所の墓地が広がっている。称法寺は津波で被災したまま放置されていたが、その屋根や外壁の復旧が終わり、内陣が復旧中であるとの貼紙を見て、ほっとした。お寺は何と言っても心の拠り所である。墓地にはいまだ墓石が倒れたままであるのを多く見ると、音信不通の檀家が多いのであろうか。墓石が立派だけに、やるせない気持ちになる。

2. 女川町災害公営住宅(運動公園住宅)

女川は、復興した駅から海へと延びるプロムナードとその両側に建つ商業施設群が既に数年前に完成しており、店舗に見える落ち着きと賑わいから、この地に根付いていると感じた。海ぎわの遠くに見える大型の漁業施設の整備が進んでおり、産業が活動していると町の形が見えて頼もしい。

災害公営住宅は駅の背面の高台に位置し、海がよく見えた。周辺に体育館やグラウンドがある広々とした敷地である。馬蹄形の敷地に8棟の住棟がコの字型に連続する配置であり、広い中庭を斜めに抜ける歩行者通路がピロティを貫通している。棟に分かれていながらも連続感がある。駐車場は建物外周に配置され、中庭は車が入らない空間である。地面レベルでの開放感と同時に、各住戸の玄関前にゆとりがある。大型の住宅もあるようだが、詳細は不明である。3、4階建てで、集会室と共にカフェがあり、居住者のコミュニティや居場所をつくることを大事にしている。建物はこの階数であると近親感がある。敷地にゆとりがあり、200戸の規模ながら豊かな共用スペースを確保しているし、中庭は連続しながらも多様な

使い方をしている。



女川町災害公営住宅の中庭と住棟配置の案内板



町営志津川東復興住宅の棟間(上)と列間の緑地(下)

道を隔てて小学校が見える。バスが何台も駐車しているのはスクールバスであろう。広域に分散した地域から子どもたちを集めてくるからであろう。海辺に近く限られた区域に密集していた街が、山を削って高台にまで広がった。その分、人口は分散して人口密度は低くなり、街の行政サービスや公共交通、公共インフラなどの今後の管理が問われる。しかも、高齢化の上に車にたよるケースが多くなる。この団地の廻りにも店舗が見当たらない。住宅としてのデザインがしっかりなされているので、それが気になる。住宅の廻りに日常的な店舗や施設があると賑わいが出てくるのだが。

3. 南三陸町 町営志津川東復興住宅

この団地は、2列に平行に住棟が並び、合計8棟、シンプルな配置である。その2列間の緑の空地は広く、もう1列建つのではないと思われる程広い緑地である。この住宅の棟間は大半が駐車場であるのが残念であったが、その広い緑地とバランスを取ったようである。2階建て棟は、棟間の広さと相まって、のどかなである。車が必要不可欠な地域であるから、駐車場は優先度が高くなる。都心のマンションを見慣れていると、全戸に平置きの駐車場を確保するとこれだけになるのかとあらためて思う。

建物は鉄骨造で外壁はサイディング貼り、鉄骨階段であるので、住戸間の遮音性が気になる。住戸の玄関ドアが引戸であるのが珍しい。高齢化を考えると引戸の優位性はあるが、遮音性や気密性をどう解決したのであろうか。

1街区離れて病院が建っている。立ち話をした高齢の居住者は、病院があるのは助かるが、周辺に商店は全く無い。病院の売店が一番近いが日曜は休みとか。移動販売車は曜日や時間が限られて不便との事。店舗は20分ほど歩いた所と聞いたが、坂道を下り、遠すぎる。買物をするのは生活の楽しみの一つであり、それが限られてしまうのは、居住者にとって残念である。街をゾーニングした功罪である。

志津川の復興住宅の建つ居住ゾーンは、この東地区のほか、西地区と中央地区に分かれており、集合住宅と戸建住宅群がある。広域に広がり、ゆったりとしている分、住んでいる人々が行き交う賑わいが限られてくる。まして高齢化と過疎化は進行する。



町営志津川東復興住宅の配置図 (南三陸町 HP から)

4. 釜石市 鶴住居地区復興公営住宅

5階建ての共同住宅と平屋の戸建住宅とが組合わさる。5階建の建物は鉄骨造である。近くにJR山田線(休業中)の鶴住居駅が予定されており、その周囲は中心市街地の計画であるが、まだ何も出来ていない。道路整備にもまだ時間が掛るようで、人々は工事現場に住んでいる感覚に近いのではないだろうか。

かつて、小中学校があった所には、サッカースタジアムの工事中であった。小中学校は、反対側の山の斜面に段状に登るように建っている。津波避難施設でもあり、中央の広い外部階段がオープンで校門がなく開放的である。小学校と中学校は教室の配置が違い、それが中央の通路でつながる配置が明快である。この鶴住居の海岸側には巨大な堤防が工事中であったが、ここに住む人々は海が見えない。この小中学校の一番上からでもやはり同様、海は見えないべきである。



鶴住居小中学校からの復興住宅とサッカースタジアム



鷺住居小中学校の開放てきな中央通路



鷺住居の復興住宅計画 (UR 都市機構の資料による)



山田中央団地の配置図 (UR 都市機構の資料から)

山田湾に半円状に沿う山田町は牡蠣やホタテの養殖で名をはせる町である。海岸沿いには水産施設が並び、町と海が一体化している感がある。防潮堤は水産施設を意識してか、それほど高くはない。山田町は高台移転を最小限にして、既存市街地を再生する方針としている。各地で大きく山を削り、宅地化した結果が今後どうであるかは不明であるが、山の緑が減った結果、海が変わる可能性がある。牡蠣は汽水域で成育するので、山と川との自然環境が牡蠣を育てる。以前から、牡蠣の養殖者が山に木を植えるなどの試みをしていることを聞いている。

団地の中庭はもう少しきめ細かいデザインが欲しかった。ベンチがあっても井戸端会議の場には遠そうである。別棟の集会室廻りの広場は広く気持ちがいい。周辺にまだ建物は少ないが、近くに店舗などがあり、街の雰囲気を感じられて、今まで見てきた団地とは違いがある。

5. 山田町山田中央団地

3棟の住宅がほぼコの字型に建ち、集会室が別棟である。今回見た復興住宅の中では、最も高く6階建てである。駐車場が少ないのではなく、道路反対側の区画にあった。この団地は中心市街地に隣接して、団地西側にはJR山田線(休業中)の陸中山田駅の予定である。街中であるのでこの階数であろう。地盤を3m盛土して建つ。海岸線から近く、6階から見ると海は直ぐそばにある。



南側棟の6階から見る山田中央団地



山田町の復興計画 (山田町のHPから)

6. 南三陸町 入沢桜沢地区災害公営住宅

この住宅は視察していないが、「東日本大災害におけるUR都市機構復興支援」平成30年1月版のパンフレットに載る復興住宅である。住戸プランに目が留まった。「玄関ポーチとバルコニーがつながる住宅である」のコメントそのものに、共用廊下から玄関ポーチがあり、通り土間を抜けてバルコニーへつながる。玄関は通り土間から入る。しかも、このバルコニーがしっかりとした広さを持ち、生活感がある。さらに目を見張ったのは、伝統的な農家の田の字型住戸プラン。この地域の生活スタイルとして、田の字型が生きているようだ。通り土間にしろ、伝統的な要素があるのは嬉しい発見。どう住みこなしているのだろう。

視察した復興住宅は多くはないが、それぞれ異なる配置や建物の計画がなされており、興味を惹いた。いずれもUR都市機構が、町の復興計画から携わっており、異なる形は、その町の姿からの案であろう。かつての一律の公団型住宅でないことは、それぞれの町の今後の姿に影響を及ぼすであろう。かつ、集会所が外部空間を含んでしっかりと確保されている。今後の各団地のコミュニティがどう造られるかに期待したい。

気になるのは、今年度から災害公共住宅の家賃の軽減が段階的に縮小されて、11年目には一般の公共住宅と同水準になる。その時、居住者は住み続けているだろうか。



入沢桜沢地区災害公営住宅の住戸プラン

震災の遺構を残す。

被災した建物を遺構として、残しておいてほしい人と、残さないでほしいとの相反する想いがある。そこに悲し

い想いがあればあるほど、辛いのは当然である。その判断は難しい。ただ、我々は残念ながら、簡単に忘れてしまう。建物が再建されてきれいに整備されてしまうと、「津波水深ここまで」の表示も他人事と見てしまう。津波被害の記憶を呼び覚まし、まず避難する事が重要であると判断するためにも、対象を選んで残すべきである。我々は忘れてしまっても、プレート境界型地震は100年ほどの周期で大地震が起き、それに伴って津波が起きる。繰り返し津波に襲われても、大きな被害が出てはやはり忘れてしまうが、津波のエネルギーは想像を超えるほど大きいことは記憶したい。

太平洋プレートは1年で8cmほど大陸の下に沈み込んでいる。わずかな量と思いきや、100年では8mほど沈み込み、そのひずみはプレート境界付近に蓄積されて次の地震が起きる。

内陸型の活断層地震では、その発生間隔は2千年から1万年、我々の生活時間とははるかに隔たった時間間隔である。記憶だけでは困難である。

1. 石巻市 旧門脇小学校

震災遺構として残すと聞いていたが、足場とシートが掛かったままで進展していない。劣化が進んでいると思われるが、外壁は洗浄したようで汚れが少なかった。校舎の前に慰霊碑がある。周辺の区画整理が終わっているので、今後、記憶はどんどん薄れていく。小学校で起きた災害である。津波の被災者が車で避難し、その車が火災源となり、校舎を被災させた、車社会ならではの津波火災である。車での避難の有り方を考え直す警鐘としても残すべきである。時間がかかっているが、遺構として残すべく計画が進んでいる。



旧門脇小学校の現状

2. 女川の交番

駅ができて、駅舎から海へ至るプロムナードの軸線がシンボリックな構成である。商店が建ち並び、緩い勾配で海へ向っており、海がよく見える。高い堤防を造らなかつたことが幸いしている。漁港であり、金華山方面への遊覧船があり、海は重要な資源、かつ要素である。この商店街が建つエリアは、海際から緩く上り坂に盛土をして地盤面をつくっている。高い丘の上にあったはずの病院が、高く見えなくなった。病院の裏山が大きく刻まれて、山の形が変わり、町の施設や新しい住宅は高台に移転して、街の形が見えてきた。

海沿いはメモリアルゾーンとして建築が禁止されるが、かつての転倒した交番はそこにある。駅からのプロムナード沿いで、シンボリックな存在となりえる。ただ、この海側は整備がまだ進んでいない。高台の市街地に工事の主力が注がれているのは当然と思われるが、街と海とのつながり、そして津波被災から盛土をしたその高さがよく分かると思う。



転倒した女川の交番



女川町の復興計画から、女川駅周辺シンボル空間

3. 大槌町 旧町役場庁舎

この町役場の保存は賛否があり、結論が出ていないと聞いていたが、取り壊されて、運動公園の一部となるようである。訪れた時は、隣りに新しい施設が開館準備中であった。「おしゃっち」と命名された文化交流センターで、木材をふんだんに使い、復興拠点施設と位置づけられている。震災伝承室を設けており、図書館を合わせた複合施設である。聞きなれないネーミングに、どんな意味かと調べて見ると、この地が御社地(おしゃち)エリアである事からの命名であり、町の文化財に指定される史



旧大槌町役場庁舎・旧大槌町役場庁舎



文化交流センター「おしゃっち」



「おしゃっち」前の公園

跡である。江戸中期に宗教、学問を通じて、大槌の郷民教化に努めた仏教家、菊池祖晴が、九州大宰府の天神社の分霊をこの地に祀った事から、御社地と名付けたと町の資料にあった。

ただ、この新しい建物には違和感がある。被災した旧町役場の存在を全く意識せず、そっぽを向いている。旧町役場を撤去しても、その存在は評価すべきであろう。例えば旧町役場が保存されなくとも、何かを感じ取ること

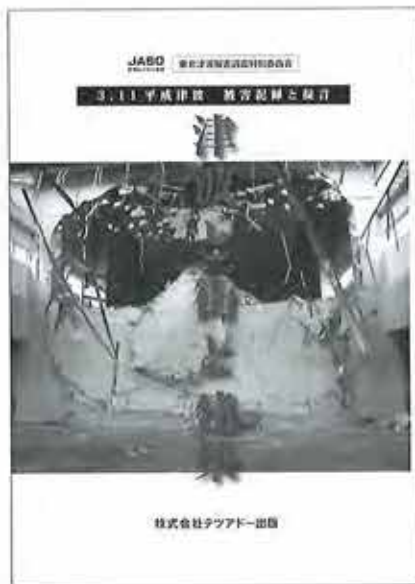
ができる。それが町の歴史であるし、町の形でもある。

この「おしゃっち」の旧町役場とは反対側に、円形に窪ませた公園があり、「おしゃっち」はそちらを向いている。ここは中心市街地としての整備地区であり、既に店舗や住宅が建ち始めている。かつてはここが、大槌町の中心地区であったし、この施設がオープンすると町の人々が集まり、賑わうであろう。

3.11 平成津波 被害記録と提言

津波と街と建築

NPO 法人耐震総合安全機構 (JASO) 東北津波被害調査特別委員会



価格 **3,885 円** (税込) 送料別途
(本体価格 3,700 円)

A4 判 オールカラー / 196 頁

お求めは (株)テツアード出版

目次

- まえがき NPO 法人耐震総合安全機構 (JASO) 東北津波被害調査特別委員会 委員長 安達 和男
- 東日本大震災基礎データ 調査概要
- 事例報告 地区統括/事例
- 考察

津波の種類と特性	江守 実実
津波の強さ 津波強度と調査結果	近藤 一郎
構造技術者が見た建物の被害 (第一次調査において)	増田 信彦
- 提言

耐津波建築設計・診断基準の提案	三木 哲
避難についての提言	岸崎 孝弘
津波に強い構造	大岡 彰
津波に強い設備	柳下 雅孝
リアス式海岸地域への提言	河野 進
平野部地域への提言	今井 章晴
- まとめ 三木 哲

〒165-0026 東京都中野区新井 1-34-14

Tel 03-3228-3401